

「私とユージン・スミスと水俣」【レジュメ】

フリーランス・フォトグラファー
石川武志

2021年、ジョニーデップが主演で映画「MINAMATA」が公開され、また原一男監督が15年かけて制作した「水俣曼荼羅」という映画も公開され、映像による水俣への関心を持った人も多いと思う。映画をきっかけに今なお救済を求めて訴える人々がいることを知らしめたことや、またフォトジャーナリストとして3年余り水俣に滞在して取材したユージン・スミスとアイリーン夫妻の仕事にも関心を呼び起こした映画の力は本当に大きいと言わざるを得ない。

しかし、映画「MINAMATA」は真実と全くの虚実が混在したの映画で、このまま映画で描かれたことが真実として信じる人もいるかと思うと、何よりも真実にこだわったユージン・スミスはどう思うだろうか。若い人に事実は自ら調べましょうといっても50年以上前の話だ。現在、当時の事実を知っている人はほとんどいないと言わざるを得ない。私は幸運にもユージン・スミスのアシスタントとして3年余りを水俣で生活を共にする機会を得た。

今回、水俣学の講演をする機会にをいただき、ユージン・スミスの三年余りの話に特化して事実を時系列にしてお話していきたい。なぜユージン・スミスが「日本の水俣病」だったのか、「ユージン・スミスの「MINAMATA」は何だったのか、いかにして写真集「MINAMATA」は制作されたのか、3年余りの水俣での取材と1975年のニューヨークでの写真集の出版までの話を時系列にした話を進めたい。それが映画と事実の違いの検証にもなり、私の体験が少しでも皆さんに共有していただけたら幸いに思う。